



壬生義士伝 みぶしでん

浅田次郎



文春文庫

©Jiro Asada 2002

みぶぎしでん  
壬生義士伝 上

定価はカバーに  
表示してあります

2002年9月10日 第1刷

著者 あさだじろう  
浅田次郎

発行者 白川浩司

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23 〒102-8008

TEL 03・3265・1211

文藝春秋ホームページ <http://www.bunshun.co.jp>

文春ウェブ文庫 <http://www.bunshunplaza.com>

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-764602-1

春文庫

壬生義士伝  
上

浅田次郎

文藝春秋



壬生義士伝  
上



序

慶応四年旧曆一月七日の夜更け、大坂北浜過書町かじよの盛岡南部藩蔵屋敷に、満身創まご痍いの侍がただひとりたどり着いた。

三日の夕刻に戦端を開いた鳥羽伏見の戦はすでに大勢が決しており、蔵屋敷から土佐堀の上手東に望む大坂城からは火の手が上がっていた。

南部藩が奥羽越列藩同盟に伍くみして官軍に抗するのは数カ月後のことで、正月のこのときには未だ旗幟きしが明らかではない。いや、旗幟がどうのというより、天下の情勢がいったいどうなっているのかが、そもそも不明であった。

大坂詰の南部藩士たちにとって、さしあたり配慮せねばならぬことは、堀ひとつを隔てて隣り合わせる彦根藩が、薩摩長州の陣に加わっているという事実である。

東照神君以来の譜代の雄藩彦根井伊家が、こともあろうにこの戦では徳川に弓を引いた。事態は混沌としている。

隣が彦根の蔵屋敷であるばかりか、土佐堀を隔てた中之島には浜田藩、福井藩、薩摩藩の蔵屋敷がづらなっている。ともあれ情勢が明らかになるまでは、一切事に関わるべからずと、大坂詰の重臣たちは判断した。

日昏れとともに、屋敷の白壁に沿って対い鶴丸の家紋を入れた提灯を高々と掲げ、灯をともした。中立のあかしである。なにしろ隣屋敷は参戦しているのだから、大坂城に籠る幕兵がいつ何どき勢いを盛り返して攻めこんでこぬとも限らない。

門前には煌々と篝火を焚き、白襷をかけた藩士が寝ずの番についた。

そんな夜更け、ひとめで落人とわかる侍が海鼠壁に傷ついた体をもたせつつ、門前までやってきたのである。隣の彦根屋敷がすでに門を閉ざしていたのは幸いであった。落武者はそこが敵する彦根の屋敷であるとは気付かずによりよると素通りし、南部対い鶴の大提灯を掲げた篝火の中に入った。

藩士たちの愕きはただごとではなかった。

月はなく、折しも身を切るような川風に小雪が舞い始めていた。乱世とはいえ、いつに変わらぬ平穏な時の流れる国表から出てきた南部藩士たちの目に、その落武者はまるで戦国の世から迷い出た亡霊のように見えた。侍の姿が瞭らかになるほど



に、誰もが声を失って手槍を構えたまま後ずさった。

侍は門前に掲げられた提灯の紋所を見上げ、そこが南部藩の蔵屋敷であることを認めると、真白い、毒のような息を吐いて呟いた。

「南部のご家中にてござんすか」

藩士のひとりだが、いかにも、と答えたたん、侍は膝から頰れた。まるでそのま  
ま息絶えてしまったかと思われるほど、しばらく地面に片肘をつけて動かなかつた。  
拔身の刀を握ってはいるが、手向かうふうはない。そこで人々はようやく気を取  
り直して、侍に近寄った。ひとりが篝から薪を抜き取って頭上にかざした。

「何はともあれ、刀ば収め申せ」

堀つづぎの彦根屋敷を気遣いながら藩士がたしなめると、侍は白鉢巻の顔をむつ  
くりともたげて答えた。

「他意はござんせん。刀身が曲がり申して、鞘に収まらねのす。ご容赦下んせ」

膝の上で無造作に握りしめられた刀に目を向けて、門番たちは鳥肌立った。

俗に刃の欠け落ちた刀を「さ、さ、らの如く」などと言う。籠とは細かく割った竹を  
束ねた道具のことである。侍の刀はまさしくその通りに刃がこぼれ落ち、切先は欠  
け、のみならず刀身は鉾元から飴の如く曲がっているのであった。

いったいどれほどの人を斬れば、鋼の刀身がこのような姿になるのであろうと思

えば、誰の口にもつなぐ言葉はうかばなかった。侍が何者で、何のために南部屋敷を訪ねてきたかは知らぬが、正月の三日から続いた鳥羽伏見の戦を切り抜けてきたことだけは明白である。

そのうち、松明をかざしていた藩士がふいに、あつと声を上げた。

「おぬし、新選組の者ではねのか」

一同はかたずを呑んだ。会津中将御預りの新選組を知らぬ者はいない。

侍は股立ちを取った袴に羽織を着ていたが、血と泥とで全身が真黒に見えた。しかし松明に照らしてつぶさに眺めれば、たしかに羽織の地色は浅葱色で、裾と袖に山形のだんだら紋様がある。

「いかにも新選組にてござんすが——」

侍はしばらく言い淀んだ。京師の人心を寒からしめた新選組の威名も、幕軍の敗れた今となっては悪名の最たるものであると、すでに悟っているふうであった。

それから藩士たちの足元に蹲ったまま、今しがたよろばい歩いてきた川端の道を少し振り返った。

「この先の八軒家というところに新選組の仮屯所がござんす。わしはようよう戦ばかり抜け、つい先ほど大坂さたどり着いたのでござんすが、すでに御城には火がかかり、公方様も会津公も船にて江戸さ落ちられたとの由、屯所内には腹ば切る者も

出る始末で——」

「そんなことはどうでもええ」

と、年かきの藩士が唸るうなるように言った。

「お前めさんは何ゆえ、ここさ参られたのすか。そのわけば訊ねてえ」

「それは……」

侍はやおら肩をすぼめて正座をし、力なく咳せわぶきながら言った。

「南部はわしの主家ゆえ——」

「馬鹿を申すな」

「いんや、わしは去る年に仔細あつて南部国表は脱藩した者にござんす。どなたか覚えのある方はござんせんか」

血まみれの横顔を松明が照らし上げた。

そうと問われても、南部盛岡は二十万石の大藩である。しかも寝ずの番に立っている藩士はみな若侍で、何年も昔に脱藩した者の顔に覚えはなかった。

ややあつて、ただひとりの年かきの藩士が驚きの声を上げた。

「じゃじゃ、名は何と申したか。たしかお前さんは、藩道場で代稽古ば務めておつた——」

侍はようやくしゅうひ愁眉を開いた。返り血と泥とにまみれた顔を藩士に向け、真白な息

を吐きながら、絞るように名乗った。

「へえ。吉村貫一郎にごぎんす。なにとぞ、なにとぞお取次ぎ下んせ。なにとぞ、ご同輩の縁もちまして、なにとぞ——」

あとはひたすら懇願するばかりであった。地べたに額をこすりつけ、武士の体面など毛ばかりもなく、かつて脱藩した主家への帰参を願うのである。

そのうち呆気にとられていた若侍たちもさすがに腹が立ったとみえて、口々に吉村なる男を罵り始めた。

曰く、かつての同輩の誼みで、いつとき匿ってくれとでもいうのならともかく、帰参いたしたいとは何事か。

曰く、要はただの命乞いであろう。南部武士の面汚しである。斬って捨てよ。

曰く、いやこのような外道は刀の穢れだ。いっそ斬らずに隣の彦根藩につき出すがよからう。

曰く、主家を捨てて脱藩をしたあげく、勝手な戦をし、敗れるやたちまち帰参を願ひ出るなど、武士の風上にも置けぬ。このような者に同輩と呼ばれるいわれはない。

——いずれの主張も道理である。しかし吉村は若侍たちから足蹴にされ、唾を吐きかけられても、ただ「なにとぞ、なにとぞ」とくり返すばかりで、その場を立ち

去ろうとはしなかった。

やがて年かきの藩士が屋敷内に事の次第を取次いだのは、むろん吉村貫一郎の懇願を容れたからではない。諸般の情勢が明らかになるまでは一切事に関わるべからず、という命により、この不穩な落武者を斬って捨てることも、彦根屋敷につき出すこともできなかつたからである。

蔵屋敷差配役を務める大野次郎右衛門は、「剃刀次郎衛かみそりじ ろうえ」の二ツ名を噂される勘定方の切れ者である。

折しも上方詰の重臣たちを招集して評定の最中であつたが、時ならぬ報せしらせを聞くともかくその不埒者ふちうちを屋敷内に入れるよう命じた。

門番の口から吉村貫一郎の名が洩れたとたん、重臣たちはみな戦わのいた。上座の大野だけが、ただひとり顔色を変えない。

「厄介なことになり申した。ここは御差配様にお任せするほかはござらぬ」

老臣が腕組みをしたまま、大野の横顔を窺うかがった。齡は若いが、四百石取りの家格と実力とを併せ持つ大野の差図に従わぬ者はいない。

大野は刀を携えて立ち上がり、羽二重の袴の腰を齊ととのえると、一同を睥睨へいげいした。

「吉村はもともと拙者せつしゃの組付足輕くみつきにござる。じゃが、今は何事も御家大事。お任せ

下んせ」

伶俐れいりな声である。

「あまりご無体は——」

と言いかけた老臣を、大野は強い目で睨にらみ据えた。

「南部一国の行末がかかつており申もす。妄言もうごんはお控え下んせ」

大野は廊下に出た。内庭に面した雨戸のすきまから、幾筋もの縞しまを曳いて雪が吹き積もっていた。戦の最中にもかかわらず屋敷を包みこむ異様な静けさは、夜半に降り始めた雪のせいにはちがいない。

脱藩者とはいえ、倒幕勢力が何よりも憎む新選組の残党である。そして新選組隊士とはいえ、もとは南部藩士である。関わりかたひとつに二十万石の行末がかかっているという大野の言も、けっして過ぎてはいない。

吉村の身柄を蔵屋敷の奥まった十畳間に廻すよう命じたのは、そこが隣家の彦根屋敷と最も離れているからである。鳥羽伏見の開戦よりこのかた、どうも堀ほりごしに聞き耳を立てられているような気がする。諸藩の蔵屋敷が建てこむこの一帯には、そのくらい緊密な時が流れていた。

奥座敷の雨戸が一枚だけ開け放たれ、廊下に雪明りがさしこんでいた。座敷に人の気配はない。

吉村貫一郎はうっすらと雪の降り積んだ庭先に、左右を門番の若侍に付き添われて座っていた。

大野は威儀を正し、廊下から吉村を見くだした。

「この、戯たわけ者が。お恥しよすとは思わねがっ」

厳いかめしい小聲で、大野は叱咤した。

その声に聞き覚えがあったとみえて、吉村はとたんに平伏していた顔を上げた。

「御組頭様」、と一言呟つぶやいたなり、吉村は瞠とら目した。

庭先や廊下に佇たたりむ藩士たちが怪訝けげんに思うほどの長い間、二人は雪の帳とばりを隔へてて睨にらみ合っていた。

城内の騷擾そうじょうが風に乗って通ってきた。夜更けとはいえあわただしく土佐堀を往還する船べりの人声も、間近に聴こえた。

吉村はやがて噎かれた甲高い声で、主家を訪れた理由を語った。

「脱藩だつぱんばいたしあんしたるは、ひとえに尊皇攘夷の志ゆえにごぎんす。六年の間、ひたすらその志に身みば挺たてして参まゐりあんした。憎にくき薩長の賊あしばらが、錦旗きんきば奉じて官軍と名乗りあんすは、天下の誤りにてごぎんす。こたびの戦にて一敗地にまみれたとは申もせ、ここで奸賊の手にかかって死ぬるは犬死と心得申しあんす。叶うことだれば、いまいちど主家に帰参きへんいたし、ご同輩ともども勤皇忠国の任につきてえと思

いあんして、新選組の屯所き離れて罷り越したる次第にてござんす」

大野次郎右衛門は聞くだけのことを黙って聞くと、吐き棄てるように言った。

「何を今さら、壬生浪めが」

憎しみのこもった声に、吉村はむろんのこと居合わせる藩士たちはみな、身をすくめた。

「お前が勤皇の土じやなぞと、誰が信じるか。せめて南部武士のはしつくれなら、新選組の屯所き取って帰し、潔く会津様のご馬前に討死せえ。良な、吉村。不義不忠の限りばしおって、あげくに帰参ば願ひ出るなど、とんでもねえことじゃぞ」

吉村は縁先になじり寄って目を吊り上げ、すがりつくように懇願した。

「そこを、なにとぞ。竹馬の誼みばもちあんして、なにとぞ」

息を詰めて二人のやりとりに耳を澄ます藩士たちの間から、どよめきが上がった。時ならぬ訪問者の名が知れ渡ったのである。

「死に損ねの不埒者に、竹馬の友よばわりされるとは心外じゃの。じゃが、刎頸の交わりとやらだれば、武士の情けばかりかけてくれよう。奥の間を貸すゆえ、腹ば切れ」

藩士たちの囁きは、その一瞬にしんと静まった。

吉村貫一郎は声を失って口を開けたまま、しばらく大野の顔を見上げていた。そ



れからがっくりと肩を落とした。

「御組頭様のお下知、うけたまわりあんす。主家の畳ば血に汚すご無礼、お許しえ  
つて下んせ」

うなだれた背に鞭でもふるうかのような、大野の厳しい声がさらに続いた。

「勘違えするな、吉村。わしはお前のごときお恥す者とは、最早、縁もゆかりもねえ。御組頭と呼ばれるのも迷惑じゃ。下知などではねえぞ、武士の情けじゃ。たかだか二駄二人扶持の小身者が、薄汚ねえ脱藩者が、御蔵屋敷の畳に血ばはら散らがしてくだばれるのじゃ、果報と思え」

大野は顔色の青ざめるほど憤っていた。廊下を振り返って、藩士たちを怒鳴りつける。

「おのおのがた、見世物ではござらぬ。退がられよ。聞げねがっ」

吉村は雨戸を閉てた廊下の先に向き直り、見えぬ藩士たちに頭を下げると、むしり取るように草鞋を脱いだ。

「灯りば持て」

大野が闇に向かって命ずると、馬口取の中間が百目蠟燭を立てた燭台を掲げてやってくる。吉村とは見知った仲なのであろう、二人は無言で懐かしげな目礼をかわした。